



学校探訪 津々浦々

“地域の魅力”再発見!

未来につなぐ 学び・絆・ふるさとパワー

福井県敦賀市立赤崎小学校

学校メモ 本校は敦賀市の北東部に位置し、敦賀湾を見下ろす標高7メートルの小高い場所にある。児童数13名の極小規模校で完全複式校である。縦割り班による異学年交流を積極的に進め、子供たちは学年を超えて仲よく活動している。



山下典子
(赤崎小学校長)

昨年、本校は赤崎海岸から現在地に移転して五〇周年を迎えた。移転当時、校舎と校庭のみの更地に、地域の人が植樹した桜の木、各家庭から持ち寄ったあじさいやツツジ、手づくりの鯉の池が今も残っている。

現在も校地の清掃・整備、学校行事等で地域との関わりがあり、つながりは深い。このふるさとパワーを教育活動に生かすべく、子供たちに必要な「学び」を身に付けさせるとともに、地域との連携・交流に取り組んでいる。

1 「赤崎っ子学び」の推進

小規模校のため、子供たちは学年を超えて仲がよく家族的な雰囲気がある。その一方で、少人数のため多様な意見が出にくく、競争心をもちにくい等の弱い面もある。しかし、少人数だからこそ可能なこともあり、それを強みとした「赤崎小ならではの」教育を進めている。

(1) 学びを深め広げる「二学年交流」と「振り返る力」の育成

一学年三名以内の複式学級（市内で唯一）においては、多様な意見を引き出すために、主体的かつ協働的に学び合う過程は大切である。一時間の授業のまとめの段階に「二学年交流」を設定することで、相手意識と目的意識が高まり学びの意欲が向上している（写真1）。上級生から昨年度の学びを生かした意見や、新しい視点や豊かな言葉の感想をもらったり、下級生から素朴な疑問や素直な称賛の声が聞かれたり、学びの質が高まっている。

また、授業の終末五分間を確実に確保し、学びや自己の変容を振り返ることを日常化している。三視点（分かったこと、友達の学びのよさ、次時に学びたいこと）から、学びや自己の変容を書く力を育てるとともに、子供同士で聞き合う力を育てている。その結果、自分の成長を肯定的に捉え素直に喜んだり、友達の良いさを感じ取っ

たりする学びのアンテナも育ってきた。

(2) 多様な学びをつくる「全校学び活動」

「全校学び活動」では、低学年から英語やN・E (News Education) の活動に高学年と一緒に学ぶことができる。学年差はあっても、異学年だからこそ生まれる意欲の喚起や対話による学びの広がりや深まりを感じている。他に全校道徳、一年を通じた俳句づくりと発表、遠隔授業システムによる他校との交流、白川文字学、百人一首、ビブリオバトル等を業間に実施している。

特に、全校読書タイムは、「福井県選定図書学校巡回事業（年三



写真1 高学年での2学年交流



写真2 全校で読書の感想交流



写真3 ポスターセッションで質問する地区のお年寄り

回、各学年一学年分三六冊を学校間で回す。「一斉読みが可能」を活用し、同時に一冊を全校児童で読破し感想交流を行う。小規模校ならではの試みである。読み通した達成感や仲間と交流する楽しさを味わわせることで、読書好きな子供を育てる一助となっている（写真2）。

2 地域との連携・交流

校区は、自然・伝統・文化の教育資源に恵まれており、子供たちを地域で育てるといふ風土がある。登下校時には地域の見守り隊が完全に付き添い、校門で子供の受け渡しを行っている。このフェ

イスツーフェイスの関係が、学校教育活動の理解、地域人材の発掘・活用につながっている。

(1) 地域と学校が一体となった赤崎っ子スクール

本校のオープンスクールは、子供たちのふるさと学習の成果の発表会にとどまってははいない。地域の人への感謝の集い、地域の食材を使ったおやつのおもてなし、地域の達人によるお話等、大イベントに発展しつつある。「赤崎っ子学び」で身に付けた力を基に、地域の人に参加・交流することで絆を一層深めている。地域の一員としての自覚を深める場として大いに有意義である（写真3・4）。

(2) 親子で危機管理意識の向上

おわりに

敦賀市では中学校区ごとに小中一貫教育を推進しており、本校はそのモデル地区に属している。今後、近隣の中学校一校と小学校三校が統合され、施設一体型小中一貫校になる。赤崎小学校での学び、地域との絆・ふるさとパワーが、これから先も受け継がれ、子供たちが、赤崎っ子の誇りをもち続けてくれることを願っています。

（やましたのい）



写真4 百人一首で孫と祖母対決



写真5 親子で作成「我が家の減災アクションプラン」